

ハルビンからペテルブルグへのフィードバック

Feedback from Harbin into St. Petersburg: Comments with a focus on the feedback circuit

セミナー「20世紀の東北アジアにおけるグローバリゼーション」
Globalization in Northeast Asia in the 20th century: Part 2: To the Harbin Station,
1898-1920 by Dr. David Wolff

神長英輔

1. 序論 三つの過程

ウルフ氏は、その著書『To the Harbin Station』において20世紀初頭の「満洲」（以下では満洲と表記、ここではRussian Manchuria、すなわち中東鉄道附属地域を指す概念）の植民地化の過程を三段階に分けている。その三つの過程とは、政策の立案、その実行と結果、結果のフィードバックである。

ここではこのフィードバックの過程に注目してウルフ氏の研究を読み解く。まずロシア帝国による満洲の植民地化の特徴をとらえる。次いでそれらに関わる七つの論点を提起する。

2. 内容

政策の立案

政策の立案の過程に関わる論点は二つある。一つは「文明化」の観点であり、もう一つは軍事的観点である。

まずは前者、「文明化」の観点である。満洲における植民地建設には、当時のロシア帝国の指導層に一般的だった「文明化」の思想が反映された。彼らは（西洋）文明化の使徒をもって自認しており、中東鉄道は「文明化のための強力な手段」とみなされた。

次いで後者、軍事的な観点である。中東鉄道はロシア本国を東北アジア・太平洋地域と結びつける強力な手段であり、大きな経済効果が見込まれた。その反面、外部からの軍事攻撃に対しては脆弱だった。計画段階においてこうした長所と短所は明らかだった。

実行と結果

政策が実行される際、その結果に大きな影響をもたらすいくつかの条件があった。変動しにくい長期的な条件が二つ、比較的短時間で変動しやすい条件が三つあった。前者の二つとは、ロシア帝国の省庁間に伝統的な対立関係が存在したこと（外務省、大蔵省、軍）と、ロシア極東地域と満洲の近接性である。

後者の三つとは、日露戦争後にロシア帝国政府の満洲に関わる予算が激減したこと、中国人（漢人）の人口圧力が高まったこと、植民地化の担い手として日本やアメリカが加わった結果、植民地化の過程がより競合的な状況になったことである。

結果のフィードバック

競合的な植民地化は、より自由主義的な政治過程の可能性を一時的ながらも満洲にもたらした。また、満洲とロシア極東の近接性は、前者において成功した政策を後者に応用する可能性を開いた。

つまり、満洲という植民地で実行された政策の結果がロシア帝国の内政にフィードバックされる可能性が開かれたのである。実際、ウルフ氏は、満洲における政策の結果が日露戦争後のストルイピン改革に応用されたことを指摘している。

3. 論点

以上を踏まえて七つの論点を提起した。政策の立案に関わるものが二つ、政策の実行と結果に関わるものが三つ、フィードバックに関わるものが二つある。詳細は以下の通りである。

1. 中東鉄道によってめざされた「文明化」とは具体的にはどのようなものだったのか。また政策立案の際にそうした思想を強く意識していたのは、どのような人々だったのか。
2. 中東鉄道の経済的な可能性と軍事的な脆弱性は、結局、どのように折り合いがつけられて建設に至ったのか。
3. 日露戦争後のハルビンに経済的な繁栄をもたらしたのは大豆貿易だった。そうした大豆貿易の可能性をロシア帝国の指導層はいくらかでも予見していたのか。
4. 日露戦争後にロシア帝国の経済的な援助が激減したことが満洲にどのような影響

をもたらしたのか。肯定的な影響もあったのではないか。

5. 日露戦争後のロシア極東と満洲に共通する経済的な利害関係はあったのか。あったとすればどのようなものだったのか。
6. ロシア極東と満洲の近接性が、満洲からロシア帝国内部に政策をフィードバックする可能性を開いたと考えてよいのか。
7. 満洲という植民地における経験が、ロシア帝国におけるより大きい（帝国規模の）政策に反映されたという例はほかにあるのか。

(かみなが えいすけ・日本学術振興会特別研究員・東京大学教養学部非常勤講師)